

家族の離散とつながり
中国雲南省におけるラフ女性の遠隔地婚出
堀江 未央 (HORIE Mio) *

1978 年末に始まる改革開放以降の中国において、急激な経済成長と共に増大する地域間経済格差は、大量の労働移動の波を引き起こしている。内陸部農村から沿海発達地域へと出稼ぎに赴く農民たちは、「盲流」や「民工潮」などと呼ばれ、研究者の関心を集めてきた。しかし、そのような労働移動の陰で、いわばもうひとつの移動の波として、女性の婚姻に伴う長距離移動が起こっていることはあまり知られていない。すなわち、西南中国の農村地域から、安徽省・山東省・河南省などの漢族農村地域への、女性の大量婚出現象である。そして、そのなかには多数の少数民族女性が含まれている。

現代中国における女性の結婚に伴う長距離移動の大きな原因は、農村地域における深刻なヨメ不足である。計画生育政策の実施によって産児制限を迫られた中国農村では、後継者となる男児出産を望むために男女比のアンバランスが拡大し、慢性的なヨメ不足が起こっている。また、若年女性の出稼ぎの普遍化に伴い、経済力を得た女性との結婚のために必要とされる婚資の高騰や婚礼の奢侈化が起こり、配偶者の獲得が困難になった貧しい農村男性が西南少数民族地域にヨメ探しに赴く現象が急増している。

この現象について、先行研究は、マクロな統計分析に基づいて女性の移動を類型化しつつ、女性の脆弱性、被害者性に関する政策提言を行う [ex. 張 (編) 1994; 万 2007; Davin 1999] というスタイルを取るか、あるいは女性個人の主体性に着目し、移動を通じた自立性の獲得を指摘する [ex. Fan 2002] かの方向に二分してきた。本発表では、これらの議論でほとんど顧みられてこなかった送り出し社会の実態を論ずるべく、女性の流出が甚だしい雲南省瀾滄ラフ族自治県のラフ族社会を例に取る。そして、女性の婚出に伴って、女性の送り出し社会であるラフ村落の家族のあり方がどのように再編されるのかを論じる。

ラフ族は、中国雲南省・ミャンマー・タイを含む東南アジア大陸部一帯の山地に居住する民族である。国境を跨いだ彼らの現在の人口分布は、歴史的な南下移住によって形成されてきたと言われている。明清朝期における漢族移民の雲南省への流入や、ラフ族居住地域への大乘仏教の伝来に伴う政教一致的な集団化、その後のキリスト教への大量改宗とその排斥など、様々な政治的・宗教的力学に伴って、多くのラフが南下を繰り返してきた。ところが、1980 年代以降、このような南下移住のベクトルは逆向きに転じ、西南中国から華南・中南地域への出稼ぎ移動と共に、婚姻に伴う女性の北方への移動が増大している。

報告者の調査地である瀾滄ラフ族自治県の P 村においては、1988 年に瀾滄大地震が発生し、多くの家屋が倒壊して生活基盤が揺らいだ時期を起点として、ラフ女性が雲南省外の漢族男性との結婚を選ぶということが起こってきた。はじめは生活苦に苦しんだ女性たちが仲介者を介して婚出するという形態が主であったが、1990 年代半ばからは、ヨメ探し漢族男性が直接ラフ村落を来訪することも珍しいものではなく、ラフ女性自身も、女性の父母や親戚たちも、漢族男性との結婚をよりよい憧れの未来のひとつとして捉えるようになっていった。ところが、2006 年ごろから、瀾滄県政府や公安がヨメ探し漢族男性に

* 京都大学東南アジア研究所、連携研究員、博士。

対する制限を設け、あちこちで検問を設けるようになったため、女性の婚出は漢族男性との対面式のマッチングではなく、再び様々な仲介者の介在のもとに行われるようになっていった。そのことは、婚出先の暮らしへの不透明性など、婚出の不確実性が増えつつあることを指している。婚出するラフ女性の多くは、婚出前に漢語を解さないことが多く、結婚後に密接な姻戚関係が築かれることもあまりない。ラフの村人にとって、女性の婚出先の漢族社会は漠然と「へパ（漢族）のくに」と呼ばれ、彼らの暮らす「ラフのくに」とのあいだには目に見えない境界が引かれている。婚出先の暮らしがどのようなものか、一度も目にしたことがないなかで、賭けという要素の強い結婚を選択する多くのラフ女性たちは、「漢族のくに」への憧れを抱いて生家を離れるが、婚出先はしばしば農村地域であるため、生家に戻るべきか、漢族夫との結婚を継続するか逡巡しつつ暮らしている。2010年の人口センサスによれば、従来雲南省にしか分布していないはずのラフの省外人口分布は、男性 2893 人に対して女性が 8062 人にまで達している。

このような遠隔地婚出が進展していくなかで、ラフの家族のあり方は挑戦を迫られている。従来、強固な親族集団を形成しない双系制のラフにとって、最も基本的な社会集団は「家」であり、「家」は労働交換や儀礼執行の基本単位であった。そして、結婚は、夫と妻、その子からなる新たな「家」を発生させる契機であり、「家」は男女双方の姻戚関係を結ぶネットワークの結節点であった。ところが、姻戚関係を継続的に維持できないほどの距離への遠隔地婚出の進展にともなって、婚出女性の属する家がどこなのか、婚出によって女性の帰属はすでに婚出先に移ったのか、あるいはまだ生家に属しているのか、という問題が、難しい問題として立ち現れるようになってきている。そのような葛藤は、儀礼の場面によく表れている。

ラフによれば、人は複数の魂を有しており、それは「身体の魂」と「炉の魂」の二種類に分けられる。「身体の魂」は、恐怖や驚きによって頻繁に身体から飛び出し、身体に不調をきたすのに対して、「炉の魂」は常にその者の属する家の炉端にあり、ほとんど動かない。そのため、「身体の魂」が身体から離反した場合は、「炉の魂」の住まう家をよりどころとして「身体の魂」を呼び戻す手続きが必要となる。このような招魂実践はラフの健康や生命維持にとって非常に重要なものであり、基本的に「炉の魂」の住まう家で行われる。この「炉の魂」は、結婚を契機に結婚後の居住地に移動すると言われる。そのため、結婚のち生家を離れる人は、招魂を行う場を生家から婚家へと移すことになる。

ところが、遠隔地婚出女性の魂に対する実践は、父母によって様々である。婚出した娘の「炉の魂」は生家には存在せず、生家での招魂も行われなくなるはずであるが、遠隔地婚出をしたにもかかわらず、娘が不在のまま、娘への招魂を生家で行い続ける父母も存在する。彼らは、結婚による娘の帰属の変化よりも親子のつながりを強調したり、漢族とラフとの慣習の違いを理由として挙げる。特に、近年では漢族夫との結婚関係を放棄して再び戻ってくる娘もいるため、娘の「炉の魂」の所在を判断することは親にとって難しい問題となる。娘たち自身も、里帰りの際に自らの招魂を希望するものもいれば、それを拒否するものもいる。家族や結婚の形態が以前よりも流動化し、変化するなかで、娘の魂の所在はこれまでのラフの慣習によって容易には判断がつかなくなり、親と子のあいだで里帰りや電話の契機に行われるミクロな交渉によって個々に定めていくしかないという状況になっている。

その一方で、近年存在感を増しているのが戸籍や結婚証といった行政書類である。「戸籍のないまま娘が帰ってくるのは、魂がないのに身体だけが帰ってきたようなものだ」というある男性の語りからは、ラフにとって戸籍が魂と同等に重要なものと認識されつつあることが分かる。戸籍は、国家の福祉サービスや教育を受けるために必須の書類であり、持ち主の常住地に家族ごとに登録されている。P村では、ある女性が、安徽省に婚出して戸籍を夫方に移籍し、結婚を放棄して帰村したものの戸籍を取り戻せないという事件が発生し、離婚も再婚もできない状況に陥ったことを受けて、多くの父母は娘の戸籍を嫁ぎ先には移させたがらない。P村から遠隔地婚出を行ったラフ女性 53 人のうち、26 人もの女性が戸籍を生家に残しているが、これは女性たちの父母が、娘の居場所を生家に残しておくことを求めたものである。

これらの対処は、基本的に女性自身の意思に基づきながら行われている。女性自身が婚出先での暮らしに満足し、一生をそこで暮らしていくことが分かれば、炉の魂への実践を生家で行うことはなくなり、また戸籍も婚出先に移すことになる。女性の移動を契機として、村や家の境界が曖昧になりつつあるなかで、ラフの村人たちは女性の属する家を明らかにするよう様々な実践で対応している。

それでは、このような現象が進展する西南中国の辺境地域について、学知から何を述べることができるだろうか。本現象は、近年では東南アジア側にまで進展してきている。中国各地のヨメ不足の連鎖は、ラオスやベトナム、ミャンマーなど、中国と国境を接する諸国から中国国内への女性の流入を引き起こしている。報告者の調査地である雲南省瀾滄ラフ族自治州においても、ミャンマー国籍のラフ女性が婚入してきたという話を何度も耳にする機会があった。また、中国のみならず、世界各地で起こる地域間経済格差に基づく国際結婚も、本現象と同様の構造を有している。かつては中国から日本の農村へ、近年ではフィリピンやインドネシアから台湾へ、ベトナムから台湾や韓国への、女性の婚姻に伴う移動は、様々にメディアを賑わせている。これらの経済格差に基づく女性の移動の連鎖について、先行研究は、女性の被害者性を前提とし、その救済措置について論ずるか、女性自身の主体的選択を評価し、それを通じた女性の主体化の過程について論ずる議論のどちらかに二分されがちであった。

研究者がこれらの現象に対していかなる主張を行うか、という問題には、常に大きなジレンマがつきまとう。少数民族女性の移動そのものを悲劇と見なして移動の規制を主張すれば、それは民族文化や民族社会の保護のため、民族文化の地理的な囲い込みを主張することにつながりかねない。また、女性の移動の自由や女性たちの社会保障を訴えれば、結果として少数民族の中国社会への同化を礼賛することにつながりかねない。つまり、何を重視し、いかなる社会や家族のあり方をよしとするのか、という研究者の態度が不可避的に問われ、様々な立場が表出するアリーナとなっているのである。

これらの現象は、確かに大きな構造のなかで起こってきたことであり、そのなかでラフの家族は変化を迫られているが、そのなかで人々は事態に対応し、生活を再編しつつある。本発表では、「あるべき社会や家族の姿」に向けての提言を行うのではなく、女性の家族を中心に据え、彼らが事態をどのように理解し、それに対して如何なる対応を行うのか、を主題化する方向性を探ることを試みた。それを通じて、彼らにとっての家族や結婚のうち、何が重視され、何が変化していくのかを記述することが主たる目的である。そこでは、こ

れまであり得なかったはずの家族のかたちが裂け目から見え隠れし、女性を中心として新たな関係性が組み替えられる。その裂け目に着目し、それを記述することによって、これまで我々が自明視していた家族・結婚・男女関係といった諸問題が逆照射されて露わとなる。このような社会や家族の再編の様子を、その生成のメカニズムと共に提示することによって、家族の新たな可能性を当該社会の内側から示しうるのではないだろうか。

P 村に暮らすラフの人々が、遠く離れて暮らす娘を思っで行う様々な行動は、必ずしも双方向的な対話とはならず、一方向的になりがちである。婚出先の地域と瀾滄県とのあいだには、物理的な隔たりのみならず、心理的な隔たりが未だ強く存在している。その意味で、国境を跨がずとも、辺境地域と内陸部とのあいだには、目に見えない境界線が引かれている。遠隔地婚出が不可避免的に起こり、またそれを強制的に制限することに意味がないとしても、彼らの相互交流や姻戚関係が安定的に継続できるような、地域間の対話のあり方を今後探っていくべきであろう。

参考文献

- Davin, Delia. 1999. *Internal Migration in Contemporary China*. New York: St. Martin's Press.
- Fan, Cindy. 2002. Marriage and Migration in Transitional China: a Field Study of Gaozhou, Western Guangdong. *Environment and Planning A*. 34: 619–638.
- 張 和生（編）. 1994. 『婚姻大流動——外流婦女婚姻調査紀実』瀋陽：遼寧人民出版社.
- 万 志琼. 2007. 「少数民族婦女外流的成因分析——以楚雄彝族婦女為例」『雲南民族大学学報（哲学社会科学版）』24(6)：63–66.